

春泥

宮本 泰子

弟が亡くなって思い出を綴った
「よっちゃん」を出版した兄
兄弟だけしか知らない事も語られ
新たな涙を誘った

四十二年しか動かない時計を
持って生まれた弟の為に
一人で両親を背負う事になった長男
春のぬかるんだ道をよるめきながら

一歩一歩進む
泥の中で躓いて転び
背負った両親が息絶えたとしても
決して悔やまなくて良い
両親の時計は其処までで
止まる事になっていたのだから
ゆっくり起きあがり春の霞の中を
燦々と輝く季節に向かって
進んで行って欲しい

独楽

宮本 泰子

誰かに仕掛けられて
独楽は回り始めた

独楽は夢中で回った
見つめる人の
褒め言葉に乗せられて
しっかり立って
誇らしげに回っていた

そんな時

僅かな揺れを感じた独楽は
バランスを崩して回る事が
出来なくなってしまう

止まった独楽は
再び仕掛けられるまで
立つ事さえ出来ない

季節

宮本 泰子

季節は何ものかによつて
運ばれて来る
それが酷暑でも
凍てつく寒さであろうとも

運ぶ姿を見た事は無いが
確実に届けられる
それを人は自然と呼んでいる

植物はいち早く察して
見せ場を作る
植物に誘われて動物が活動する
植物が季節を受け取らなかったら
動物は気が付かないかも知れない

相対論

森 公宏

良いこと
悪いこと
人それぞれ
価値観による
大きい
小さい
人それぞれ
比較するもの次第

天国
地獄
絶対的
でも…

これも人それぞれ

いるみねいしよん

森 公宏

点灯

チカチカと点いたり消えたり

赤や青や黄色…

イルミネーション

見ていると夢見心地

暫しはこの

世知辛い現実から逃避できる

いるみねいしよん

きらきらと輝いては移り行く

(いつまでも輝く訳はないのに…)

もしかするとこの世の幸せなんて

瞬くイルミネーションのようなもの

なのかも知れない…